

P プライベート アクトレス A

● 再会は水族館で ●

Original

赤石路代 Michiyo Akaishi

Novel

野原広子 Hiroko Nohara

ATION gone Agency
ning by the form
good have been as not as because O's MAHOUTSUKAI



don't never give up NOVEMBER 14 LOI
MAHOUTSUKAI de y cow re dario antw

y then it's new BOTTLE keep devil BODY great kabuki closing
as such maneger shopping in New York Chicago New orlins L
le vious highest by recaus and urban life not as L.C. INC. such

Although all along then it's
KASABURANKA in MORROKO

KSS
Comic
Novels

プライベート アクトレス

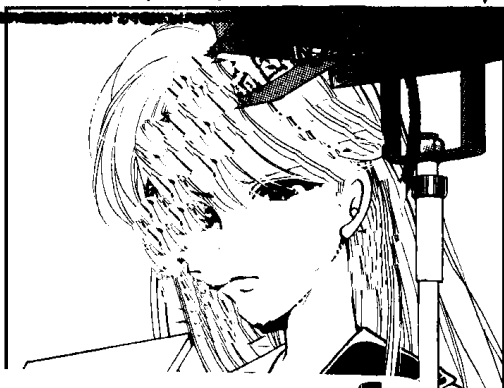
再会は水族館で

江苏工业学院图书馆

Original

Novel

赤石路代 Masayo Akashi 蔵書章 野原広子 Hiroko Nohara



プライベートアクトレス

P.A. —再会は水族館で—

1998年12月30日 第1刷

著者 野原広子

発行人 本村真章

編集人 高野秀夫

発行所 KSS出版

(株式会社ケイエスエス)

〒141-8538

東京都品川区西五反田1-21-8

電話 編集部 03 (5434) 5112

販売部 03 (5434) 5012

印刷・製本 大日本印刷株式会社

©Michiyo Akaishi, Hiroko Nohara、小学館

Printed in Japan 1998. ISBN4-87709-311-7

遺本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、販売部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、編集部あてにお願いいたします。

KSSホームページ <http://www.kss-inc.co.jp/>

P.A. プライベートアクトレス
再会は水族館で

目次

海の宝石箱 5

ストーカーはOLが大好き 23

母の恋人 69

だから赤毛のアンは嫌い 87

グレース・ケリー発見記録 123

サロメの口づけ 147

再会は水族館で 168

あとがき 198

装画・赤石路代
装丁・新田和子

海の宝石箱

青く透明な水が、小早川志緒^{しお}をつつむ。たくさんの魚がうねり、泳ぐ。

トンネル水槽で有名なS水族館。志緒はドームの中央に立って、蝶のように白い羽を広げて舞うエイを見上げる。魚が動くときだけ水がとろりと光る。

志緒はゆっくりと瞳を閉じて光景を消し、また青の世界にもどる。こうしていると、光がほのかにとどく深海に、沈んでいくようなやすぎを覚えるのだ。

平日の午後、学校を早退して、ここに来るのは今日で4度目だ。つい最近、2ヵ月前。あのときはミズクラゲの水槽の前から離れられなかった。

なんて美しい生き物なんだろうと、志緒は思った。絹糸よりもっと細くて長い触覚を、優美に動かしながら、半円の体をふくらませたり、すぼめたりして漂っている。この水のような生命体は、水と戯れるためだけに生きている。何も考えず、何にも思い悩まず、体内に水をふくみ、吐き出すことだけで生

きている。このことが志緒を感動させた。

その前に来たときは『海の宝石箱』と名づけられた、熱帯の魚たちに目を奪われた。色彩の魔術師といわれた天才画家マチスだって、こんな配色は思いつかなかっただろう魚たちが、何くわぬ顔で、思い思いに遊んでいた。

こうして、そのときによって志緒を魅きつける水槽は違うけど、最後は決まってトンネル水槽の中央で目を閉じていた。そして目を開いた瞬間、深い眠りから覚めたような爽快な気分そうかいになっていたのだった。

ところが今日の志緒は、今までのように、やすらぎもしなければ、爽快にもならなかった。何度目をつぶり開いても、そのたびに覚醒していく。体中の血が逆流して、毛穴が開きっぱなしになったみたいだ。

「生息水域か…」

その気持ち弾けそうになるまでふくらんだとき、志緒は、ひとり言をいってみた。この水族館に入ったときに聞いたアナウンスが、志緒の中でリフレインする。

「……魚は水温やエサによって、それぞれ適した生息水域があります」

背後の水槽を振り向くと、無数のイワシが銀色の腹をギリリと光らせて、思いつめたように一方向を

向いて群をなしていた。瞬間、志緒は月曜日朝の、全校朝礼を想像した。高校2年の志緒も、もちろん海の表面近くを泳ぐ「イワシ」の中のひとり、のはずなのだが、子供のころから群れたことがない。

「……その環境を活かして、魚たちは精いっぱい生きています」

別に気取って群れからはずれていたワケではない。ただ群れられなかったのだ。17才の今まで、親友と呼べる友だちも、彼氏と人に紹介できる男のコも持ったことがない。それを悲しんだこともない、といえど嘘になるけど、クヨクヨ悩んだところで、どうなるものでもないことは、志緒が一番よくわかっていた。

志緒は清純派独身女優、永沢さゆりの隠し子だ。父は実力派俳優、緒方正和で、家庭のある緒方に志緒の存在はいつさい知らせていないと、子供のころから聞かされている。それを「誰にもいっちゃダメよ」と母にいわれたことはない。

だけど、1ミリでもそれを自分の口から人に話したら、母がとても困るのは、スキャンダルという言葉を知る前からわかっていた。そんな志緒に「何でも話せる友だち」なんて、出来るワケがない。

しかし今の志緒には、そんなことはどうでもいいことのように思えた。それより「生息水域」だ。海の表面近くで軽快に生きるイワシやサバ、もう少し海中をもぐるとイカやタイ。もつと深いところには、毒々しい顔つきのチョウチンアンコウやメルルーサがいる。それぞれ、生きる場所がある。

たとえば志緒の通うお嬢様校として有名な私立高校にも、いろんなタイプのコがいる。女の園にうんざりして、大学は共学に行こうと予備校に通っているコたち。テニスでインターハイを狙っているスポーツ少女。表面上は校則を守って大人しそうにしているけど、休み時間になるとトイレに直行してケータイで彼氏と話しているグループ(中にはウリをしているコもいるというウワサ)。みんな自分の個性を活かした、生息水域で息をしている。

志緒には、その水域がない。いや、ないのではなくて、必要とあらばどの水域でも、ずっと昔からそこにいたように生きて、人に見せている。それがどんなに無謀なことか……。魚だったら、1時間も生きていけない水域を行ったり来たりしているんだ。しかも時間無制限の現実の中で。その現実が志緒を興奮させた。私、そんなことしてたんだ。これからも、多分……

志緒は中学2年のときから、P.A.(フライベートアクトレス)をしている。舞台もカメラも台本もなく、実生活の中でアドリブで注文通りの人間を演じる仕事だ。

きっかけはスカウト。遅刻を気にしながら駅から学校までの道を、てててと早足で歩いていたとき。

「ねーねー君、テレビとか映画とか、好き？」

志緒はとつさに身がまえた。

「俺、こういうものなんだけど、君ならすぐにスターになれるよ」

男は顔中で笑うと、志緒の前に名刺を差し出した。

『日青プロダクション 代表取締役 二階堂義孝』

志緒はチラッと見た瞬間、男の名刺をひったくって、握りつぶしていた。

「ナンパなら、渋谷でしな」

男は芸能関係者の象徴のような、ブランド眼鏡をかけていた。このカンケイ者というのがクセ者だ。運の悪い日は1日に4、5人のスカウトマンに声をかけられる。その男たちの顔といたら、どこいつもこいつも顔に「信用しちやダメ」と大書きしているような男ばかりだ。こいつも例外じゃない。

志緒は名刺をポイと道路の横の、緑色のスチール製のゴミカゴに捨てた。

「ア——ッ！」

男は驚いて声をあげ、志緒の顔をマジマジと見た。顔もスタイルも「今日からアイドル」なのに、キツと男をニラむ目つきに、ただならない強さがある。

「映画もテレビも、だいつつ嫌い。そういえば女のコがノコノコついてくると思ってたのかよ！ フン、ばかばかしいっ」

それに、この口の悪さといったら……。しかし面白いことに、怒れば怒るほど志緒の顔だちのよさが際立つ。さらに気品のようなもので漂いだした。男はその場につ立つて、スタスタと足早に遠ざかる志緒の後ろ姿を見送っていた。

8時15分。正門に続く道を曲ろうとしたとき、志緒は時計をチラッと見た。このままだと完全に遅刻だ。裏門に回ってここからダッシュすれば、ギリギリ間に合うかも知れない。

「ヨシッ！ 行くか」

志緒は緑色した初夏の匂いを胸いっぱい吸いこむと、気合いを入れてピョンと小さく飛び上がって走り出した、とたん。

「キャーッ」

「ああっ！」

茶色い小犬の尻尾を踏んだ。

「ごめん、ごめん、大丈夫？」

とつさに小犬を抱き上げて、小さな背中をなでる。

「クーン、クーン」

小犬は志緒の胸で丸くなった。

「クイン！」

バスケットボールをわきに抱えた男のコが走ってきた。志緒と同じ年くらいのコだ。なのにこの時間、白いＴシャツの上にブルーのランニングシャツを重ねて着て、下はベージュのチノパン。

「あつ、ごめんね。あなたの犬？」

「もう平気だよ、クイン。それより君こそ時間、いいの？」

「えっ？」

「遅刻だよ——普通なら」

男のコは足元にボールを置くと志緒からクインを抱き取って、春風のようなさわやかさで志緒に笑いかけた。

「あなたこそ…」

「俺？ 俺はいいの、あそこに用があるから」

親指をたてて、ま後ろの建物を指差した。軽くカールのかかった髪がふわっとゆれて、男のコは指差したほうを振り向く。

『東城赤十字病院』

「病院？ お見舞いかなんか？」

「——ん、……まあ」

男のコは恥ずかしそうに顔を赤らめた。志緒はそれ以上聞いてはいけなような気がして、男のコがひろい上げたバスケのボールをいきなり奪った。

「あたしにもやらせて」

「おいおい、いーの？ がっこ」

志緒は腰を落として2、3度、ボールをつくと、少し離れたところにあるバスケットボードをめがけてシュートした。ボールはボードの上のほうに当たり跳ね返った。

「あ——っ、大はずれ！」

「だめだよ、あの線ねらって、こう……」

男のコはボールをひろうと、トントンと右手でドリブルしながら、左手でボードを指差す。と、そのとき、男のコと志緒の後ろから、地を這うようなうなり声が耳に飛びこんできた。

キャン、キャン、キャン！

クインが10倍もある大きな犬の口にくわえられて、鳴き叫んでいる。

「こいつ、離れろ！ 離れろよっ」

男の口は牙をむいた犬に飛びかかつていった。志緒は後ろからカバンを振り回して犬の尻を殴った。

「あっちいけっ、シッ、シッ」

ようやく犬はクインを口から離し、後ずさりしだした。いつ噛みつかれたのだろう。男の口の腕から血が流れている。

「——つてえ……。やべえ」

その後の……、たった30分たらずの間に起きたことを、なんて言えがいいのだろう。志緒は自分の足元をひっくり返されたような気分だった。

「——大丈夫だよ、ひとりで」という男の口に、強引につきそって病院に入ると、まず看護婦が顔色を変えた。

「小柴くん！」

彼の名前を呼ぶと、あわてて走り出した。

「先生！ 小柴くん、出血していますっ！」

白衣のすそをひるがえし、若い医者がすっ飛んできた。腕の血を見ると玄関中に響きわたる大声で、看護婦に指示した。

「すぐ血液製剤^{フアクトリ}、用意！ 輸血もだつ。X線もスタンバイ。直哉、何やったんだっ！」

志緒にはそれほどの大けがには見えなかったのだけど、この騒ぎ、普通じゃない。それにこの病院で男のコ、小柴直哉くんをみんな知っている。な、なんなんだ？

「そんなにケガ、ひどかったの？」

病室に消えた直哉を見送つてると、点滴を下げたおじいちゃんが横に並んだ。

「直ちゃんか。あの子は血が止まらない病氣なんだよ。すぐ治療しないと出血多量になっちまうんだ。たとえ内出血といえども、命とりになることもあるんだ」

さっきまでの直哉のさわやかな笑顔が浮かぶ。

「このごろはいい薬ができたけど、昔はこの病気でハタチまで生きるのは難しかったつてよ。大変だよなあ」

おじいちゃんの言葉が、ずしん、ずしんと志緒の胸にのしかかった。病院の空気が変わったような気がした。今まで病院は病気を治すための心強いところと思っていたけど、白い壁も、医者や看護婦の白い制服も、なんだか急に心細い、はかないもののように思えてきた。

気がつくとも志緒は、学校とは反対の方向に歩いていった。直哉の顔が頭の中から離れない。…あんな人がいるんだ。死と隣り合せなのに、あんなに明るくて、やさしい。なのに私は…、私は、何やってんの。